

野元 正

NOMOTO Tadashi

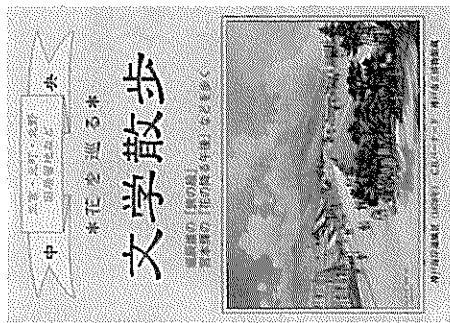
神戸市が発行する「花を巡る文学散歩」各区版を二〇〇三年からボランティアで執筆、監修してきた。

生来の怠け癖から去年、ようやく北区版が出来て、あとはむずかしい西区だけとなった。それまで各区には、一〇を優に超える名作の舞台があり、材料に事欠かなかった。

ところが西区は、「源氏物語」、司馬遼太郎の「播磨灘物語」、吉川英治の「新書大岡記」、伊藤なかみの「助手席にて、グルグル・ダンスを踊って」くらいしか思い浮かばないのだ。何か良い材料をこ存じだったら、ご教示願いたいと思っている。

それはさておき、本稿では、その「文学散歩」の執筆、監修において、ふと筆者の心に浮かんだが、公の小冊子には掲載できなかった、たわごとに近い夢想を少し書いてみたい。

筆者は主として小説とエッセイを書いているが、学者ではない。だから、資料と資料の狭間に想像を膨らませ、妄想に近い「知られざる神戸」を自由に書いても許してもらえるのではないかと思う。



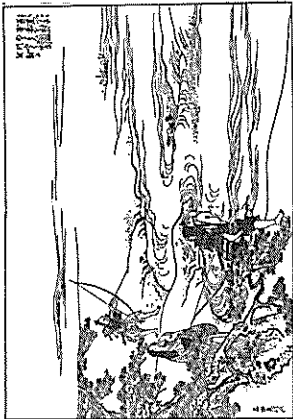
「花を巡る文学散歩」中央区編表紙

万葉集（舒明天皇の御代〈舒元元（六二九）〜天平字三三（七五九）年までの約一三〇年間）の三歌人は当時かなり古い伝説として詠っている。西求女塚古墳、処女塚古墳、東求女塚古墳と西から古い順で並ぶ三世紀後半の三古墳（諸説あるが、坂江涉著『神戸・阪神間の古代史』の「東神戸・阪神間の古墳論」の築造年代、山陰地方関連土器等の出土に拠った）が、伝説とは関係ない、それぞれ往時、この地方を治めた豪族の墳墓であることは、明らかだ。しかも三古墳は現在と違って、海の汀近くの景勝の地にあったようだ。それは西求女塚古墳の地には「味泥」という湿地を表す小字名が残ることや、三古墳とも古代の汀線にはほぼ一致するらしい現在の国道四三号に極めて近い。なお、『撰津名所図会』には、『万葉集』『大和物語』に記載する所なれば、年歴久遠にして世に名高し。按ずるに、これみな上古の荒塚にて、文人騷客、俚談を採つて風藻となすと記されている。

なお、平安初期の『大和物語』は少し過激で「能」の修羅物に近く、伝説の舞台は少し西の「生田川」の物語として語られていく。やがてそれは観阿弥によつて謡曲『求女塚』となり、明治になつて日本初の現代語による森鷗外の戯曲『生田川』となった。

さてこの妻争い伝説のもとになった秘められた物語の真実は、もう万葉時代にはすでに忘れられてしまつていたといえるだろう。万葉三歌人はおそらく当時、この地に残る伝説をもとに詠つたと思われる。そしてその伝説には秘められた誰があつた。

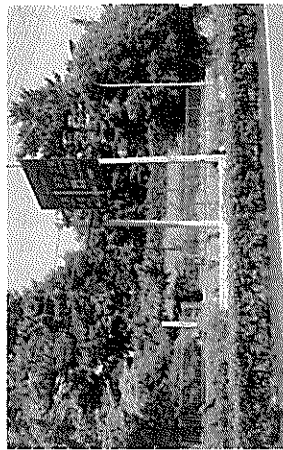
二四八年、邪馬台国の卑弥呼が死に、二六五年に倭の女王（奄皇）が中国・晋に遣使したのは三世紀中頃過ぎであつた。



「撰津名所図会」妻争いの生田川

■をどめ塚・求女塚

神戸市灘区御影町東明の「処女塚古墳」（前方後方墳）を挟んで東求女塚古墳（前方後円墳）と西求女塚古墳（前方後方墳）の妻争いの菟原姫子伝説は、万葉集に田辺福麻呂（巻九十一八〇一〜一八〇三）、高橋虫麻呂（巻九十一八〇九〜一八一二）、大伴家持（巻九十四二二一〜四二二二）の歌が収録されているのはよく知られている。伝説の骨子は美しい娘をめぐるふたりの男が競い、心やさしい女は板挟みになつて悩み、処女は死を選ぶというパターン化されたもので、各地に似た伝説が残る。神戸の場合、三つの歌を総合すると、処女の思は地元の菟原壯士でなく泉州（信太（和泉市）の血沼）の血沼壯士であつたというのが、おもしろい。



処女塚古墳

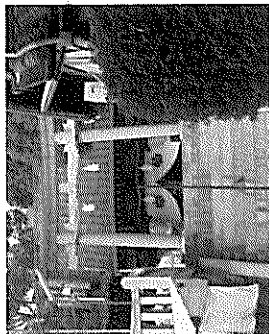


西求女塚

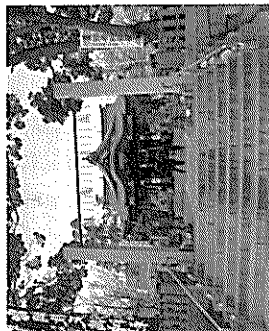
この三古墳はそんな世紀の末近くに相次いで築造され、誰かが埋葬されたのだ。そして伝説の処女をこの古墳の主の子孫の豪族と考えると、この地の豪族（処女？）が大和政権（血沼壯士？）に離れながらも、山陰地方を根拠地とする勢力（菟原壯士？）との決別をまだどちらも決めかねていたことを秘めているような気がしてならない。

また、今は出土数が多く必ずしも卑弥呼の鏡と言われなくなったが、三角縁神獣鏡はじめ鏡がこの三古墳から多数出土している。処女塚古墳を中心とする「御影」の地名は、神功皇后の姿を清水に映したからとか、『和名抄』によると、古代、この地域に銅細工に関わる技術者集団「伴の部鏡作部」の一族が居住していたので、「鏡美郷」と称したとかに由来するという。筆者は、鏡美郷の中心地高羽町四丁目の鍛冶に欠かせない水神「高羽丹生神社」の鎮座や、今の鶴甲団地の「滝の奥」に残る地名の「ゴアネ」「カナホリ山」や同じく石屋川左岸の網敷天満神社の社室の銅塊一鏡に結びつく痕跡、そして石屋川上流には紀元前二世紀から二世紀にかけて約四百年栄えた青銅器時代の「桜ヶ丘銅鑿」出土地などから、何かしらこの地域は鍛冶と関係が深く、出土物から山陰系勢力のにおいを感じる。

一方、古墳形態からいうと、東求女塚古墳は前方後円墳、処女塚古墳と西求女塚は前方後方墳と古式だ。一概に言えないとしても大和政権の象徴のような前方後円墳と山陰地方や関東地方など他の勢力の証のような前方後方墳。東求女塚古墳は、あ



高羽丹生神社

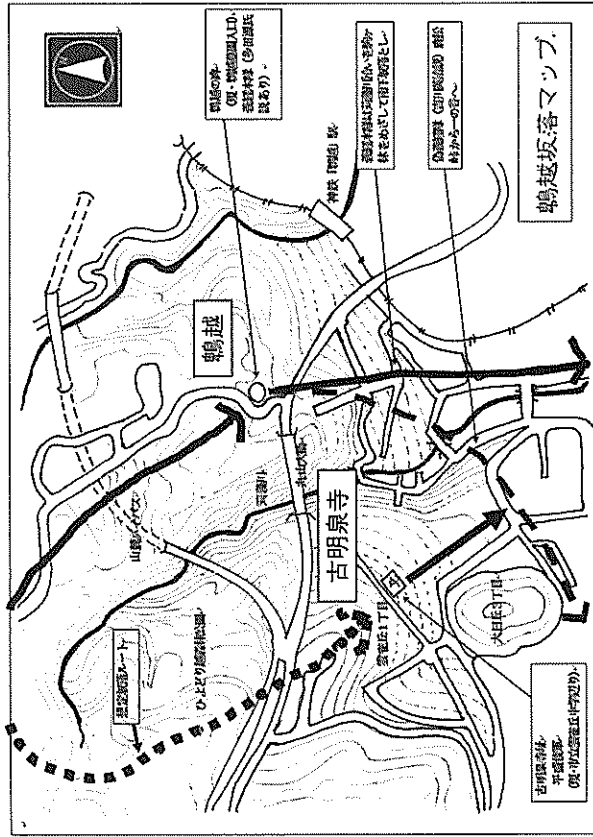


網敷天満神社

たかも旧勢力である処女塚古墳を奪う期を窺うように対峙している。空想はドンドン膨らみ、まるでこの地域に古代の国境線があつたかのように思えてくる。

■源平合戦鶴越坂落考

NHKの大河ドラマ『平清盛』は、リアリティを追求しすぎて画面が汚いとか不評のうちに終わったが、筆者は楽しく欠かさず観た。



鶴越坂落マップ

また、一の谷説と思われる『平家物語』では、義経が坂落しを敢行したのは越中前司平盛俊の陣ということになっている。

これは鶴越説の大きな根拠の一つとしてあげられている。なぜなら、盛俊は平家の山の手軍の武将であり、現在の鶴越から萩原川の深い谷を隔てた西側にある奥大日丘（現・大日丘町の雲雀丘中学校辺り）の「古明泉寺」に陣を構えていたのだ。そして盛俊顕彰碑も萩原川沿いにあり、戦死した場所も古明泉寺の南、現在の長田区名倉町辺りとされている。



会下山から須磨鉢伏山遠望

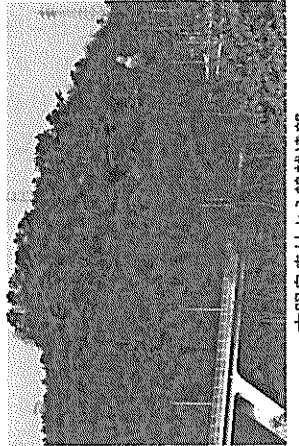
吉川英治の『新・平家物語』は鶴越説をとり、山の手軍の本陣は「うなごノ岡（会下山）」にあつたとし、義経は鶴越の谷向こうに位置する古明泉寺に陣を敷く盛俊を恐ろすための陽動作戦として鶴越から義経が指揮していると思わせた七十騎ほどの偽義経隊を鹿松峠から一の谷へと向かわせ、盛俊軍は義経を逃してなるものと追撃した。その隙をついて義経は安徳天皇がいる御座船が停泊していると思われた駒ヶ林の浜をめぐり萩原川沿いの緩やかな坂を一気に駆け下る。筆者も平家の武将が戦死した地が、駒ヶ林の浜へ注ぐ萩原川沿いに点在することから、一の谷合戦と総称される源平の合戦は萩原川沿いを中心として展開されたと思いたい。源平の合戦は、後白河法皇の平家追討の意旨による安徳天皇と三種の神器の奪還をめざした戦いである。番遣の最短コースである中央突破を図った義経の奇襲は山の手からだつたと思う。

しかし筆者は、『平家物語』「坂落」は、あつたという立場を取りたいと思っている。坂落としては盛俊の古明泉寺の陣にされ

神戸にとって清盛は世界の海をめざして兵庫津の礎を築いた恩人だ。モタナスト詩人竹中郁は、エッセイ集『私のびつくり箱』で、神戸市民はもつと清盛に感謝しなければならない、と言っている。筆者もその通りだと思う。『至妻鏡』などの歴史書や『平家物語』や『源平盛衰記』は、勝者源氏の視点で書かれているから、どうしても清盛は悪役でなければならないのだ。

清盛というと、源義経の鶴越——坂落としを思い出し、鶴越は何処にあつたのか？ という大きな命題が浮かび上がってくる。同時代の一級資料といわれる九条兼実の『玉葉』にしても、『平家物語』にしても、肝心なところは何も書かれていない。現在の段階では、定説がなく、まったくの謎なのだ。だから、おもしろい。誰でもそれぞれの説を掲げて論争に参加できる。資料をあたるとしても、想像や推測を混じえないで真相究明は不可能に近いと言われている。

坂落とし論争を大きく分けると、今も地名が残る鶴越がその場所だとする『鶴越説』と、『平家物語』などに書かれた須磨一の谷だといふ『一の谷説』とがある。岩波文庫『平家物語』三の巻九「坂落」では、一の谷のうしろ鶴越にうちあがりとしていっている。一の谷の背後に鶴越はないのだから、神戸をよく知るものは、この極めて曖昧な記述を納得できない。それで一の谷とは、東の生田の森から一の谷の西の木戸に至る広範囲の地域の総称であり、そう解釈すれば、鶴越が一の谷の背後にあるということも矛盾がないなどという説もある。



古明泉寺址から鶴越遠望

たというのが筆者の考え方だ。そう考えれば、『平家物語』の記述とほとんどが一致する。鶴越からは萩原川の深い谷が障害になって坂落しの奇襲はできない。しかし、鶴越へ至る鶴越臺園の中で萩原川の源流を渡るのなら容易であろう。そして鶴越道の対岸の尾根を辿れば古明泉寺の背後にでる。あとは『平家物語』の記述とよく馴染む。

これが、筆者の鶴越坂落考だ。しかしあくまでも推論に過ぎない。諸説は厳然として存在する。『一の谷説』や、文学や伝承として『平家物語』の一の谷合戦がいささかも色褪せるものではない。



萩原川丸山橋下

野元正 (のもと ただし)
神戸エルムマール文学賞事務局長
造園家

1945年東京生まれ。京都大学農学部林学科卒業 (造園学・環境デザイン専攻)
技術士 (都市及び地方計画)・元神戸市公園砂防部長 (2005年 北村賞受賞)
1994年『氷の箱』第1回神戸ナビール文学賞佳作受賞
1995年『幻の池』第4回小谷剛文学賞佳作受賞
2009年『藍色の窓』第3回神戸エルムマール文学賞受賞
2010年度「半とんどの会」現代芸術賞受賞
現在：NHK文化センター神戸教室・西宮ガーデンス教室 他、講師
著書：第1小説集『幻の池』・第2集『海の萌え立ち』・第3集『八景』・第4集『藍色の窓』他

